

最初にこのことを「千五百坪の森に囲まれた（気分になる）暮らし」と書いたが、この土地を紹介してくれた隣家の友人が以前に撮った写真を見ると木が一本も生えていなかったことがわかる。ここは緩やかな斜面を造成して人工的につくられた土地だったのだ。一区画千から千五百坪で共同井戸から給水される計画的な分譲地だったことが伺える。

私の入手した土地の登記を見ると、昭和一九六六年八月に分筆され翌六二年六月に前住者が購入していることがわかる。おそらく、その頃に造成されたものであると思われる。今から五十五年前になる。私が森といっているのはその間に育ったものということだ。最初の冬の大雪で除雪を手伝ってくれたSさんは分譲当時のことを記憶しており、木といえば区画道路沿いにトドマツが植えられていたくらいだという。それと巨石。私の土地にも立派な石が四個も鎮座している。この石については最初は趣味的に馴染めなかったが、そのうち何かありがたいものに見えてきて、今では年のはじめに供え物をして拜んでいる。

さて、話を木のことに戻そう。区画道路沿いのトドマツ以外の木は先住者が植えたかというところ、そう思われるのは数本のオンコだけと見うけられた。結構な樹高で目立つのはハンノキとヤチダモで、あとはシラカバやクリそしてヤナギだ。いずれも庭園樹としては馴染みが無いもので、このあたりの丘陵の固有種に符合する。ヤチダモやヤナギが多いのは、ここが当初から水気の多い土地であったことが伺える。ハンノキやシラカバはパオイオニア樹種の代表格だそう。パオイオニア樹種は、栄養の乏しい土地でも真つ先に根を生やし、空中の窒素を地中に固定し次の世代の樹木が成育しやすい環境をつくってくれるのだそうだ。

クリはどうしてか。これは先ほどのSさんの話では、せつせと植林したのはエゾリスだとのこと。エゾリスは冬眠しないので雪に覆われた冬中どこかで食べ物を調達しなければならぬ。そのために、秋になるといろいろな木の実を集めては落ち葉の下などに埋めて冬に備えるのだそう。確かに地面をよく見ながら歩いていると、いろいろな木の実が落ちている。そしてその周辺には、その実をつける木が見当たらないことがある。これがエゾリスの植林なのか。だが、見つけるのは雪の融けた春先なので、どこに埋めたか忘れてしまったものかとも思う。彼らの忙しない行動と、どこかおバカそうに見える風貌がそう思わせるのかもしれない。隣家で自然に生えてきたクルミの小さな木をもらって、将来、私たちがいないかもしれないがエゾリスの食べ物になればと敷地の片隅に植えたことがある。植えて一ヶ月ほど経ったころその木の根元にクルミの実が落ちているのを見つけた。もちろん、その木のものではないのは明らかだが、エゾリスが将来の実りを楽しみにお供えをしたのではないかと真面目に考えてしまった。おバカに見えて実はしっかりとした将来設計を描く力があるのかも知れない。私が見ている木々は、造成で裸地となったこの土地に風や虫や動物たちの力を借りて長い時間をかけて根付いてきたものたちであるのだ。



いし
と 木々